

京都国立博物館
開館120周年を記念して開催！
会期は36日間、
京都でしかご覧いただけません。

京都国立博物館開館120周年記念 特別展覧会
海北友松
2017年4月11日(火)～5月21日(日)

休館日：月曜日
開館時間：午前9時30分～午後6時 金・土曜日は午後8時まで
※入館は開館の30分前まで

観覧料税込

一般	大学生	高校生
当日 1500円	1200円	900円
前売・団体(20名以上) 13000円	10000円	7000円

※中学生以下、障がい者の方とその介護者1名は無料となります(要証明)
※キャンパスメンバーズは、学生証をご提示いただくと同体料金になります

※前売券の販売期間は、2017年1月11日(水)から4月10日(月)まで
主なチケットの販売所、オンラインチケット(公式サイト)、チケットぴあ(Pコード：767951)、ロソンチケット(Pコード：55333)、セブンチケットイープラス

CGVレイガイド、JTB各店舗、近鉄の主要駅の駅営業所、主要レイガイドとコンビニエンスストアほか
※チケットの購入時に手数料がかかる場合があります。

公式サイト：<http://yusho2017.jp/>

※会期中、一部の作品は展示替を行います。
主な展示替：前期4月11日～4月30日、後期5月2日～5月21日
展示期間のないものは過期展示です。



●記念座談会
「日本美術応援団、海北友松を応援する!!」
4月15日(土)
時間：午後1時30分～午後3時
会場：京都国立博物館 平成知新館 講堂(地下1階)
山下裕二(明治学院大学教授、日本美術応援団団長)
井浦新(俳優、京都国立博物館学芸部長)
山本英男(京都国立博物館文化大使、日本美術応援団団員3号)
※定員200名、購料は無料(ただし、本展覧会の観覧券が必要です)
※当日の11時より平成知新館1階にて整理券を配布し、定員になり次第配布を終了します。

音声ガイドナビゲーターは、
石丸幹二さん!
石丸さんがとぎとぎに友松に扮しながら
知られざる生涯と作品の数々を
ドラマティックにご案内します。
1台、500円(税込)
解説時間：約35分

石丸幹二 (俳優)

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM
〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527
電話：075-525-2473(テレホンサービス)
ホームページ：<http://www.kyohaku.go.jp/>

●JR・近鉄・京都駅下車、駅前市バスD2のりばから206・208号、D1のりばから100号系統にて博物館・三十三間堂前下車、徒歩すぐ ●京阪電車：七条駅下車、東へ徒歩7分 ●阪急電車：河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行にて七条駅下車、東へ徒歩7分、または河原町駅下車、四条河原町から207号系統にて東山七条下車、徒歩3分 ●市バス：博物館・三十三間堂前下車、徒歩すぐ、または東山七条下車、徒歩3分 ●ご来館はなるべく公共交通機関をご利用ください。駐車場は有料となっております

友海松北
かみづみ ともみatsu

2017年4月11日(火)～5月21日(日)
開館時間：午前9時30分～午後6時 ※金・土曜日は午後8時まで(入館は閉館の30分前まで) 休館日：月曜日
京都国立博物館 平成知新館
KYOTO NATIONAL MUSEUM

主催：京都国立博物館、毎日新聞社、日本放送協会、NHK、フジテレビ近畿、協賛：大和ハウス工業、日本写真印刷、協力：日本書堂

武家に生まれ、

桃山を生きた。

京都国立博物館
開館120周年記念
特別展覧会



この絵師、
ただものではない!

KANISHO YUSHO
Kyoto National Museum 120th Anniversary Commemorative Special Exhibition
重文(雲龍図 部分) 海北友松筆 建仁寺(京都)

桃山最後の巨匠、 よよよ登場!

桃山画壇の巨匠です。近江の戦国大名・浅井家に仕え「家中第二の剛の者」とうたわれた綱親を父に持つ友松でしたが、その父や兄を戦で次々と失う中、武門の再興を夢見ながらも、刀を絵筆に持ち替えて戦国の世を生き抜きます。武士の気概と絵師の誇りをあわせ持った友松は、やがて独自の画境を拓き、京都の名だたる寺院を舞台に、その才能を花開かせ、天皇や宮家のために筆をふるいました。本展では代表作はもとより、数少ない初期作や新発見、初公開作品、さらに諸人との幅広い交流の跡を物語る書状や文書類など70余件を展示。今年、開館120周年を迎えた京都国立博物館の節目の年に、この誇り高き孤高の絵師・海北友松の史上最大規模の大回顧展を開催し、知られざる生涯と画業の全貌をご紹介します。

刀を握るはずだった手は、 絵筆を握んだ!

誤落芸家

近江浅井家の家臣・海北綱親の五男もしくはは「男」として生まれた友松は、幼い頃、東福寺に喝食(有髪の小童)として入りました。しかし、主家や兄が信長に滅ぼされるに及び、還俗して狩野派の門を敲き、画の道に進んだと伝えられています。



遅咲きの "孤高の絵師"

友松が絵師として頭角を現すのは、六〇代になってからのことでした。武門再興はかないませんでした、DNAに刻まれた武士の気概は、確実に彼の描く画に投影され、名だたる寺院や公家の邸宅に筆をふるいました。しかし、友松は永徳や等伯のように、画壇の覇権争いに加わることはありませんでした。実力がなかった、というのではなく、敢えてそこに身を投じることを選ばなかった、というのが彼の心境に近いのかもしれません。

武士の気迫ほとばしる! 刀を振り下ろしたかの ような筆さばき

余白を大きくとり、また、仄々鳥を添えることでしっとりとした情趣が生み出されています。一方で、鋭いスピードで描かれた鞭のようになりしなる枝ぶりには、さすがにまでの気迫が感じられますが、あるいは、こうした表現は友松の中に流れる熱い武士の血がなごしめたものなのかもしれません。



龍を描けば日本! 海を渡った名声

威風堂々とした龍、人面のような龍、不気味な龍。友松は様々な龍を描き、海に向かう、朝鮮にまで「龍の名手」としての名声をとどろかせました。表紙の作品は建仁寺大方丈の札の間を飾っていた超大作。現在は掛幅装。かつて大方丈に足を踏み入れた者はさぞ驚いたことでしょう。また、下方の龍の顔からは、いかにも神獸らしき凄まじい不気味さが伝わってきます。



「海北友松夫妻像の賛文を読んでもよい」

【エピソード①】「友松は春日局の父と親友だった」

明智光秀の重臣・斎藤利三(春日局の父)と友松、そして真如堂の東陽坊長盛は、心を通わせる友で、利三が本能寺の変の咎で処刑された時、友松は東陽坊とともに遺骸を奪い、真如堂に手厚く葬ったといえます。この武勇伝が真実かどうかはわかりませんが、真如堂には利三と友松の墓が並んで立っています。

また、別に友竹が記す「海北家由緒記」によると、本作で友松の妻の妙貞が着る三葉葵の紋付と縞の小袖は、春日局から拝領したものが描きこまれています。

エピソード②「心は武士?」

友松は因幡国鹿野城主・龜井茲矩に良馬を求めましたが、どれも気に入らず、自ら駿馬を探し出し、派手な衣装を身にまとい、乗り回したといえます。武士の気概と一切の妥協を許さない友松の頑固ぶりがうかがわれる逸話といえます。

エピソード③「誤落芸家」

「武士の家に生まれた私だが、誤って芸家(絵師)に身を落としてしまった。あわよくば時運に乗じて武門再興をはかりたい」と、友松は語っていたそうです。確かに、武家中心の世であればこのように嘆くのも理解できないことはありません。しかし、彼がそうした雑念を振り払い、画道に進んでいったことは、今に遺る優れた作品群が物語っています。

海北家に伝わる 友松の『履歴書』

▲重文 海北友松夫妻像
海北友松筆 海北友竹賛

画は亡き父母を偲んで息子の友雪が描き、画の上の賛には孫の友竹によつて友松の履歴がのちに書き添えられました。偉大な友松に対する崇敬の念と親愛の情がはつきりとうかがわれるとともに、人間味あふれる友松の姿もありありと映し出されています。



見えてきた謎の五〇代

▲相模國(左幅) 海北友松筆
サントリー美術館(米国)
Photography: Ashiya Art Museum of Saito Foundation

友松の初期作とみなされる大幅も襷で、狩野派風の筆法と友松風が混在しています。およそ五〇歳代の作とみなされます。

ゴージャスな金屏風! まるで近代絵画

▲重文 花卉図屏風(右隻) 海北友松筆
妙心寺(京都)

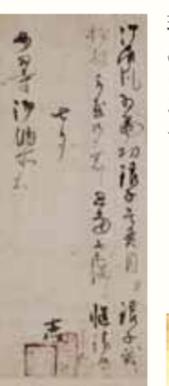
実物大ほどに描かれた牡丹の数々は、まさに今を盛りと咲き誇る風情をたたえ、濃厚な色彩が牡丹の圧倒的な生命感を助長してやみません。金地の輝きのみを背景としたシンプルな構図は斬新で、まるで近代絵画を見ているかのようにです。



桃山時代の領収書 珍品の初公開!!

▲屏風画料請取状(妙心寺宛)
海北友松筆 妙心寺(京都)

「銀子一貫目並びに銀子二十枚を確かに受領しました」とあり、友松から妙心寺に宛てた画料の請取状(領収書)です。右下の花弁図屏風を含む妙心寺のために制作した金碧屏風三双に支払われた報酬の可能性が高く、今の価格で約36万円、一双あたり約80万はかなりの価値であったとも考えられます。次の注文のための戦略価格だったのか、寺からの注文を栄誉なことと考えてのことだったのかは不明ですが、絵師による自筆の領収書が残っているのは大変珍しいことです。



宮家・公家との交わり 友松の新境地!

▲浜松図屏風(右隻) 海北友松筆
宮内庁三の丸尚蔵館(展示4月25日—5月21日)

晩年期の友松は、天皇家や宮家、公家衆の用命も賜るようになりました。こちらは八条宮家の後身にあたる桂宮家に伝わったもの。大和絵の主題や技法による珍しい金碧画の作例で、友松の新境地を示すものといえます。いかにも公家好みの画風であり、宮家の調度品とするに相応しい、風格も備えています。



友松の到達点—— 最晩年の最高傑作、 60年ぶりの里帰り!

友松の水墨画は、ほとぼはしる気迫を、全面に押し出した画風から、次第に詩情豊かで静謐な画風へと変化していき、きました。そうした好例にあたる「月下溪流図屏風」は、昭和三十三年にアメリカの美術館が所蔵して以来、戻ることがなかった幻の最高傑作。ついに実現した初めての里帰り展示となります。



▲月下溪流図屏風(左隻) 海北友松筆
Photography: Mori Museum, courtesy of the Anderson-Akins Museum, Ashi
ネルソン・アトキンソン美術館(米国)

日本の水墨画の完成を告げる長谷川等伯の「松林図屏風」に比肩される名品。早春の夜明け頃、臘月の優しい光が溪流を淡く照らす様を、このようにに情感たっぷりに捉えた作例は他に類をみません。まさに、友松が辿りついた孤高の境地といえます。

——友松は、
最晩年まで絵筆を握り続け、
慶長二〇年(二六二五)大坂夏の陣の直後、
八三歳でその命を終えました。

こんにちはリン!
トラりんだリン!
みんなよろしくね
今年(2017年)は京博のメモリアルイヤー、
たくさんイベントを
企画中だリン!
ボクもいっぱい活躍するよ、
京都国立博物館の日や、
ボクのブログを
チェックしてほしいリン!
みなさまとともに新たな歩を
踏み出せば幸いです。



京都国立博物館は
一一〇歳!
2017年 京都国立博物館は、
開館120周年を迎えます。
開館120周年を記念して、
として開館して以来、古都京都を中心と
した寺社仏閣等の貴重な文化財を保護す
るために保存・収集・研究・展示を進めてき
ました記念すべき今年、京都国立博物
館ではさまざまな展覧会やイベント
を準備しています。未来へむけて
みなさまとともに新たな歩を
踏み出せば幸いです。